

一、

雨の多い土地だった。

鬱蒼とした森林の向う側に広がる山々は、一時山向うに雲を溜め込み、溜まった雲は、山気とともに流れ込んで来る。雲は、霧になり雨になりこの山国をしつとりと濡らし尽くす。夏の間中降り続く雨は、草木を育み、美しく豊かな自然を作り出していた。

目に痛いほど青々とした山林の一角、雨霧のたち込める谷間の開けた場所——そこに山中には不似合いな豪華な楼閣が朦朧と聳えている。

正門、外壁、屋根や梁に至るまで極彩色の彫刻が施され、その豪華絢爛さは、山林を抜ける建物の前へ来た者を仙郷にでも迷い込んでしまったのではないかと錯覚させるほどであった。

——八仙樓。  
ハセンロウ

そう名付けられたこの楼閣がいつからここにあり、誰が建てたものかは土地の者すら定かではない。一説によれば窮暮之戦の直後、荒廃した世俗を逃れ、山中へ引きこもりたいと願った厭世家の富豪が建てたものではないかと言われている。

今、八仙樓には、その富豪とは縁もゆかりもない一人の女主人と数十人の男たちが住んでいた。

——レンジヨウシ 嬖娘子。

これが、その女主人の呼び名である。

この嬖娘子が、いつから八仙樓に住まうようになったかも、また定かでない。いつの間にか無人であったはずの八仙樓に住みついていたのである。

嬖娘子は、普段この八仙樓に引き籠もり暮らしているが、月に一度、轎かこ子に乗って下山し、町

へ出て行く。その姿を目の当たりにした者は口々にこう言った。

——東離一の美女なり。

創世の女神も、仙界の天女も、帝の寵姫も、八仙樓の變娘子には及ぶまい。

謹厳な出家も、枯れた老翁も、乳飲み子ですら、男ならば變娘子を一目見れば恋煩い、妻子も恋人も財産も、そして命すらも捨てて、八仙樓へ慕い向かうであろう。

いささか大げさとも言える風評である。

だが、美しさ以上に變娘子を有名にしているのは、その好色極まりない性質だった。

變娘子が山を下り、町へ出る理由は、見目麗しい男子を探し出す目的なのだとか。

變娘子は、これはという美丈夫を見つけると、山に連れ帰り、八仙樓にて侍らせる。

外界から隔絶された山中の楼閣では、變娘子と集められた美丈夫たちとの淫蕩の限りを尽くした退廃的な生活が行われているのだと言われている。

これから語られる物語は、この稀代の毒婦、美しくも怪しい變娘子にまつわる実に幻魔怪奇な、怪力乱神の物語なのだ。

さて、その變娘子の住まう八仙樓の門前である。

雨降りしきる中、激しく声を荒げ、變娘子の名を喚き呼ばれる者たちがいた。

「出て来い變娘子！」

「男を惑わす大淫婦めが！ 惑わした男を返しやがれ！」

喚いているのは、屈強な肉体の二人の男だった。顔つき逞しく、手には鉄環のついた杖を握っている。見るからに江湖でならした武芸者といった風貌だ。

その背後には、うら若く華奢な娘が一人。二人の男とは異なり、何も喚こうとはしないが、青ざめた表情には強い決意があり、瞳の輝き強く、しつかと八仙樓を睨み据えている。

男たちが一時喚くのをやめ、娘を振り返った。

「安心しなよ。あなたの取られた婚約者は俺たちが取り戻してやるからよ」

そう言つて爽やかに笑う。娘は、不安そうに声を漏らした。

「でも……乱暴なことは……」

「ああ。大丈夫だ。變娘子の野郎と話をつけるのはあんだだ。だが、向うが荒っぽいことをして来ねえとも限らねえ。そんな時は、俺たちが守つてやる。少々、凄んでやりもするがな。その方が話も通りやすくなるつてもんだ」

「ありがとうございます。縁もゆかりもない私のためにそこまで……」

「いいつてことよ。あなたには、一宿一飯の恩がある」

「それによ。俺たちや、あんなみたいな娘さんが困つていたりついついお節介焼きたくなくなつちまうのよ」

照れくさそうに鼻の頭を掻き、二人の好漢は再び八仙樓へ向き直り、大声を上げ始めた。

「本当にありがとうございます……」

娘は、目頭に涙を滲ませ、深々と頭を下げるのであった。

彼女は、山麓にある小村の地主の娘である。

幼い頃より親しみ慕い合った男がおり、その男とは秋口に祝言をあげる事が決まっていた。だが、数日前、娘の婚約者の端正な容姿が、山を下りて来た變娘子の目に止まり、八仙樓に連れ去られてしまったのである。

婚約者を奪い返したい娘であったが、八仙樓に侍る男どもの内には腕の立つ者も幾人かいて、村の男たちでは到底手が出せない。娘は、泣き暮らすより他なかったのである。

そんなおり、娘の家を訪れたのが、今、喚き声を上げている二人の男だった。

廻国の兵法者である彼らは、一夜の宿を乞うて来ただけの者たちだったが、娘の話に同情し、男を奪い返してやると申し出てくれたのである。

娘は、ならず者ばかりと思っていた江湖人の内にもこのような義侠心に溢れた者がいるのだと知り、胸が熱くなるのを感じていたのであった。

どれほど喚き続けた頃か、やがて、八仙樓の門が内側より荒々しく開かれた。

「ええい！ 喧しい！ 何者だ！」

「無法にも門前にて變娘子様を罵り騒ぐとは、無礼であろう！」

語気も激しく門内より雪崩れ出て来たのは、刀剣で武装した十数人の男どもだった。そろいもそろって顔かたち整った美青年ばかりである。面には薄らと白粉すら刷かれてあった。

だが、ただの優男というわけではない。顔に似合わずその身は筋骨逞しく、刀剣を構える身のこなしも様になっている。それなりに武芸の心得のある者たちだ。

が、娘の助っ人を引き受けた二名の武芸者は、臆することがない。

「おまえらにゃ用はねえ！ 變娘子を出しやがれ！」

「この娘の婚約者をかどわかし悪婦を連れて来い！」

勇猛に叫び返した武芸者の声に美丈夫たちは顔を真っ赤にする。

「貴様！ また變娘子様を侮辱したなっ！」

「うぬらのような、狼藉者に變娘子様がお会いになるものか！ 去れ！ 去れ！」

「あくまで去らず、これ以上變娘子様へ暴言を吐くとあらば容赦なく斬つて捨てるぞ！」

美丈夫たちの劍幕は、今にも手にした刀剣を振り回しかねぬものだったが、武芸者二人は、嘲るように高笑う。

「はははっ！ 斬つて捨てる？ 面白い。おまえらごとき柔弱者に江湖でならした俺たちが斬れるものかよ。この娘さんの手前、大人しくしてやつてるが、おまえらが手向うつてんなら、力づくで變娘子を引き摺りだしてやつたつて構わないんだぜ！」

「抜かしたな！」

美丈夫と武芸者、双方、一触即発の睨み合いを続ける。娘は、ひやひやしながらその様子を見守ることしかできない。

霸氣ぶつかり合うこの空間に、ふいに澄んだ声音が響き渡ったのは、そんなおりであった。

「——何事ですか？」

神韻とした、よく通る声だった。

途端、美丈夫たちの身より殺気が消える。代って戸惑うような、あるいは、うっとり陶酔に浸るような色とその面に刷かれて行った。

先程まで荒々しかった美丈夫たちの急な豹変に二名の武芸者と娘は、怪訝な面持ちとなる。

「れ、變娘子様……」

「わざわざ出て来られたのですか……?」

「ここは危のうございませす。どうか、お下がりにください」

美丈夫たちの内よりそんな声が聞こえて来る。

人の壁の向う側に誰かいた。美丈夫たちは、その誰かに声を掛けている。

(變娘子！)

直感した娘は、婚約者をかどわかしただ憎つくき悪女の顔を見てやらんと武芸者たちの後から顔を覗かせる。見れば、奥よりしずしずと蘭歩を進ませて来る者がいた。

(この人が變娘子……!?)

娘は意外の感に打たれ、目を疑う。

数十人の男を侍らせる妖婦。男を惑わす大淫女。そう聞いていた娘は、變娘子のことをさぞ臆長けて脂ののった年増女であろうと想像していた。だが、今初めて目にした變娘子は、娘の想像した人物像とはまるでかけ離れていたのである。

薄紫の旗袍きほろを纏うほっそりとした華奢な肢体、刷毛のごとく長い睫毛、磁器のごとく白い面は、可憐であり、むしろあどけなくすら見えた。碧玉を思わせて蒼い瞳は澄んでおり、唇は桃李のよ

うな薄桃色。

身のこなし楚楚として、純情可憐を絵に描いたような美少女がそこにいたのだった。

八仙樓の變娘子の噂は娘が幼い頃からすでに広まっている。それにも関わらず、目の前に出現した變娘子は、娘などよりもっと年若い十代そこの乙女にしか見えなかった。

—— それにしても美しい。

てらてらと光芒を放つかのような——ある種の神聖ささえも湛えた美貌である。

娘は、女であるにも関わらず、しばし、うっとりとその美貌に見惚れてしまっていた。

くらぐらと酔ったような心地になり、

—— いつまでも、この人を眺めていたいわ……。

—— ずっと、ずっと、この美しさを愛でていたいわ……。

そんなことすら脳裡を過った。

が、すぐに、この目の前の少女が己の婚約者を奪った憎い女であることを思い出す。

(いけないっ！)

幻惑されそうな自分自身を心中で叱咤し、二人の武芸者の後より進み出、叩きつけるようにことう言った。

「あなたが變娘子ですか！」

變娘子は、口元にあるかなしかの笑みを浮かべ、どこかきよんとした顔をしている。

面憎さを覚え、娘は、さらに声を張った。

「私は村の地主の娘です！ あなたがかどわかしした私の婚約者を返して下さい！」

變娘子は、小首を傾げた。小鳥のごとく愛らしいその仕草に、娘は、本当にこの少女が、自分の愛する男を奪って行ったのか疑わしく思えてくる。

「私がかどわかしした……？ あなたの婚約者……？」

變娘子の唇より、そう声が漏れる。寶石が転がるような実に耳ざわりのいい声色だった。

「ごめんさい。あなたが何を仰っているのか、まるでわからないわ……」

「李青！」

娘は、すっ呆けることを許さないとばかりに声を放つ。

「李青！ あなたが連れ去った私の婚約者の名前です！ 李青を返して下さい！」

娘の激情に反し、變娘子は、憎らしいほど落ち着いている。

「李青……李青……」と忘れていたかのような声をあげた。

——「ああ」と得心がいったかのような声をあげた。

「思い出したわ。李青。確かにうちにいるわ。あなたの婚約者だったの？ 素敵なお方よね。でも、

変ね。あなた少し誤解しているのじゃないかしら？」

變娘子の口調は、まるで仲のいい女友達に話しかけるように気安いものだった。

「誤解？」

「ええ。私は、李さんをかどわかしてなんていないわ。李さんは、自分から望んで私のもとに来

たのよ。こんな素敵な婚約者がいるなんて、私、全然知らなかった」

「嘘！ 李青が、自分からあなたのもとに行くはずがない！」

變娘子は、愛らしい眉根を寄せた。

「困ったわ。どう言ったらわかってくれるのかしら……」

「李青を連れて来て！ 李青と直接話をさせて！」

「そう。そうね。じゃあ、そうしましょうか」

意外にも變娘子が、あっさりとして承したので娘は拍子抜けしてしまふ。

變娘子が、傍らの美丈夫へ李青を連れて来るよう申し付ける。命じられた美丈夫が八仙樓の内

へと下がって行った。

娘は、變娘子を睨みつけながら愛する婚約者が出て来るのを無言で待った。

間もなく、奥より美丈夫に連れられて一人の男が楼閣の内より歩み出て来る。

「李青！」

と、娘は、歓喜の声を上げる。が、その顔が即座に引き曇った。

「李青……？」

出て来た彼女の婚約者——その顔つきが彼女の知る李青のものとはまるで異なっていたのだ。

端正だった顔がだらしなく緩んでいる。口の端からは、涎が垂れ、瞳は、とろんと濁り、まるで夢の内にもいるかのよう。歩む足取りすら酩酊しているかのごとくである。

「李青！ 李青！ どうしちゃったの？ 李青！」

娘がそう呼びかけても、李青は、彼女の方を見ようともしない。ただ、變娘子に濁った眼差し

を向け続けるばかりである。明らかに正気の面持ちではなかった。

「李先生。この方が、あなたの婚約者だつて仰つてるけど」

變娘子が、李青にそう声をかける。

李青は、一時、娘に目を向けるも、すぐに變娘子へと向き直り、

「知らない」

と言つた。

娘の顔が、さつ、と青ざめる。

「李青！ 何言つてるの？ 正気に戻つて、李青！」

娘は、泣き出したい気持ちで叫ぶが、愛する男は「知らない。知らない」と壊れたように言い続けるばかりだ。

變娘子が、李青の耳元へと囁きかける。

「ねえ、李先生。知らんぷりは、可哀想だわ。あなたは、私のもとに来た時、こう言つたわよね。變娘子様の他に愛する人などいませんんて。だから私は、あなたをここに置くことにしたのよ。でも、こんな素敵な婚約者がいらつしやるなら村へ戻つた方がいいんじゃない？」

それを聞いた途端、李青の顔が、くしゃつ、と歪んだ。

ひつ、ひつ、と嗚咽を上げたかと思うと、地に伏して泣き喚き始める。

「いやだ、いやだ！ 變娘子様、俺を捨てないで！ 俺が愛するのは變娘子様だけ！ 俺をここに置いて下さい！ 俺を愛して下さい！ 變娘子様に捨てられたら、俺は死ぬしかない！」

大の男が人目も憚らず赤子のごとく泣きじゃくり出したのである。

娘は、異様な光景に戦慄を覚え数歩後ずさる。變娘子が、さも不憫そうな顔を向けて来た。

「こつこつわけなの。ごめんさいね。李先生は、もうあなたの元には戻りたくないさうよ」

娘は顔面蒼白となり、身をわななかせていた。

生涯おまえを愛し守り続けると誓つてくれた婚約者の心変わりに傷つくよりも、精悍で男らしい快男子だった李青がこうまで豹変してしまつてゐる異常に恐怖を覚えたのだ。

ちら、と改めて變娘子の美貌へ目をやつた。

燦然と輝くような美しさ——見ていただけで脳髓が蕩けそうな美しさである。

變娘子の身より発散される美の可視光線が、網膜を透過し視床下部へと直接到達して来るかのようにだ。無意識の内に、變娘子を賛美し、跪きたい誘惑に駆られてしまう。

麻葉のような、洗脳光線のような——この世ならぬ美貌。

——魔性！ 變娘子は、魔性の者だ！

これほどまでの圧倒的な美しさを持ち得る者が尋常な人間のはずがない。

彼女の愛する婚約者は、變娘子の魔性の美貌に魅せられ、正気を逸してしまつたのだ。このまま李青を變娘子の美光の圏内に置き続けていては、どうなつてしまふかわからない。

娘は、無様に泣き伏す李青に縋りつき、懇願するように呼びかける。

「李青！ 李青！ 帰りましょう！ こんな女の元にいるからあなたはおかしくなつてしまつたんです！ ここにいては駄目！ 私と一緒に村に帰りましょう！」

だが、李青は、いやいやをするように首を振り、娘の手を払い除け、娘の言葉を聞こうとしない。娘は、助けを求め二人の武芸者を振り返った。

「お二人、手を貸して下さい！ 李青を引っ張つてでもここから連れ帰りましょう！」  
が、そこで愕然となった。

武芸者二人の眼差しが、變娘子に釘づけになっていたのである。表情はだらしなく緩み、美丈夫たちと争っていた時の覇気がまるで失せていたのだ。

「ねえ、手を貸して！ お願い！」

再度、娘にそう言われて二人の武芸者は、ようやく我に返った。

「お、おう……そうだな……」

「う、うむ……」

だが、そう言い交すばかりで行動に移ろうとしない。ちらちらと、變娘子の方へと目線を、向けたり、離したりを繰り返している。

「ねえ、早く！」

「あら。遅い方々」

娘の焦れ声へ、變娘子の甘やかな声が割り込んだ。それとともに香しい薫香が、ぷうんと吹き寄せて来る。香りに鼻腔を打たれ、びくんと武芸者二名が、硬直した。

「旅の方？」

變娘子にそう問われ、二名は、ぶるぶると身を震わせている。

じつとりと脂汗の浮いたその顔は、心中にて激しい葛藤と戦っている者の表情だった。二人は、變娘子から放出される美の魔力に必死で抗おうとしていたのである。

「よかつたら中でお食事でもしてゆきませんか？ 旅の話でも聞きたいわ」

艶やかに笑って発された變娘子の美声を受け、武芸者二名の顔が弛緩する。

「しよ、食事だつてよ……」

「ど、どうする？ 食事ぐらいなら……」

顔を見合わせ、そんなこと言い出す二名。すでにその身は、じりじりと變娘子の方へと歩んで行こうとしていた。二名もまた、變娘子の美貌の妖術に惑わされんとしていたのである。

「駄目！ 行っちゃ駄目！」

娘が、必死に声を張った。それによって何とか踏みとどまった二人。歯を食いしばり、苦悶の表情で變娘子から目を逸らさんとする。

と、そこで變娘子が、ちらつ、と目線を下げ微笑んだ。

「あら……そんなに大きくして……」

頬を朱に染めた變娘子の目線が向いていたのは、武芸者二人の股間であった。

そこに衣服を押し上げ勃然と屹立するものがある。

ここまで變娘子の誘惑に抗い続けて来た二名。だが、精神よりも肉体が逸り、變娘子へ向かわんとし、股間のを怒張させていたのであった。その股間を變娘子の清らかな目線が撫でている。それを思うだけで二名の武芸者は耐えがたいものがあつた。

しかし、さすがは江湖の好漢。顔面を真っ赤にし、耐え難きを耐え続ける。が、その辛抱の要害も次に発された變娘子の言葉によつて敢え無く陥落されたのであった。

「その大きなもの……鎮めてさしあげましょうか？」

この一言が、二人の理性を崩壊させた。

催眠術にでもかかったかのように、ふらふらと變娘子の方へ歩み寄つて行つてしまふ。ついに義侠心篤かった二人の快男兒も變娘子の悪魔的な美貌の虜となつてしまったのだ。

「ちよつと、待つて！ お願ひ！ 行かないで！」

娘は、武芸者の手を引つ張つて止めようとする。

が、武芸者は、先程までとは打つて変わり、別人かと思うほど冷淡な態度で、

「うづるさじ！」

と一声、娘を突き飛ばした。

雨に濡れた地面に打ち倒れ、泥にまみれた娘が、がばつ、と顔を上げた時、すでに二名の武芸者は、變娘子に連れられ八仙樓の内へと歩んで行つてゐる。もはや娘の方を振り返らうともせず、美丈夫たち共々そろそろと奥へと進んで行つてゐた。

その一群の内に愛しい婚約者の姿を見つけ、娘は声を張り上げる。

「李青！ 李青！ 戻つて来て！ 李青！」

しかし、その叫びも虚しく、彼女の婚約者だった男は、二名の武芸者や美丈夫たちとともに八仙樓の門中へと歩み消えて行く。

やがて、無情な響きをあげ門が閉じられた。

門前に一人残された娘を騁るように、雨は冷たくさあざあと降り続くのであった。